

ハーブのゆめ

瀬戸内町立古仁屋小学校 三年 せき かよ

ぼくの名前はハーブのハーブ。奄美の森に住んでいる。ぼくのゆめは、人間になること。ぼくは、奄美の森では、きらわれ者なんだ。なぜかって、ぼくは、友だちになりたい相手にがぶりとかみついてしまう。ぼくにとつては、仲良くしたいっていう合図なんだ。人間のあく手みたいなものなんだ。ぼくのキバにはどくがあつて、あいさつがわりに、がぶりと、人間も森の動物もどくが体中にまわつてしまう。だからなかなか友だちもできないんだ。なんだかかなしい。ぼくは、こんな自分がいやで、奄美の森のおく深くに住んでいる、まほうを使える黒ウサギのおじいさんのところに、そうだんに行った。

「ハーブや、そんなに人間になりたいのか。よし、今からわしが、まほうをかけてやる。今日から三日間だけ、人間にしてやろう。今から町へおりて行き、さいしょに目があつた子どもとお前は入れかわることができる。」

ぼくはわくわくしながら、森をおり、町の小学校のうら山のガジュマルの木にのぼってながめていた。教室では、四時間目の算数の勉強をしていた。みんな

なまじめに先生の方をみて、しんけんに勉強をしている。

「一人くらいこつちを見て、ぼくと目を合わせてくれないかなあ。」

と思つていたら、一人の男の子がまどの外をぼーつとながめていた。

「よしあの子と入れかわろう。」

とその時ぼくは、その子とビビツと目が合った。その子は心の声で話しかけてきた。そういえば、黒ウサギのおじいさんが、

「心のきれいな子どもは、動物や植物とも話ができるんじゃよ。」

と言つていたのを思い出した。

「ハブくん、木の上で何をしているの。」

「こんにちは、ぼくは、ハーブのハーブ。ぼくね、人間の子どもになりたいんだ。勉強もしたいし、友だちとあそびたい。三日間だけぼくと入れかわつてくれない。」

そう言うと、その男の子は、

「ふーん、そうなんだ。ぼくの名前は、しゅん。ぼくも勉強も好きじゃないし、三日だったら入れかわつてもいいよ。みんながこわがるハーブになるのも楽しそうだしね。」

と、次のしゅん間、電流が走って、ぼくとしゅんくんの体は入れかわった。ぼくは、ねんがんの人間の子どもになれて、うれしくてとびあがりそうだった。

四時間目の後は、はじめての給食。今日は、奄美のけい飯の給食だった。はじめて食べるけい飯は、とっもおいしくて、ぼくは、おかわりを二回もした。昼休み、友だちと遊んでいると、ぼくは、ハブになったしゅんくんの、

「たすけて。」
の心の声が聞こえた。

ハブが出たと、先生たちが、ハブとりぼうをもつてしゅんくんをつかまえにきたらしい。ぼくは、心の中でしゅんくんに、「とにかく森の中へにげるんだ、そして、できるだけ高い木にのぼること。つかまるんじゃないぞ、がんばれしゅんくん。」と言った。

しゅんくんは、なんとかにげきいたらしい。ぼくはほっとした。

ぼくは学校が終わって、家に帰った。宿題もちゃんとした。でも、さっぱりわからなくて、夜の九時までかかってしまった。

人間の子どもも楽しくない。ゲームをしたり、テレビを見たりしようとすると、お母さんが、
「宿題は終わったの。さっさとしなさい。」

って。ぼくは、お手伝いもがんばった。ぼくの仕事はおふろを洗うこと。決まっているらしい。

黒ウサギのおじいさんとの約束の三日が終わった。しゅんくんが、ぼくと入れかわるために、ぼくの所にもどってきた。

「しゅんくん、人間の子ども、大変だね。もつとたくさん遊べるかと思ったら、宿題もたくさんだし、ぼくはやっぱりのんびりと森の中でくらすのがいいな。人間はいそがしすぎる。」

しゅんくんも言った。

「ぼくも、ハブとりぼうでおいかけられるのは、もうたくさんだよ。本当にこわかった。」

ハブにもどったハブは、黒うさぎのおじいさんに、この三日間におこったことを、話した。

「ハブ、他人をうらやんではいかん。自分の気持ち一つで人生は楽しくもつまらなくもなる。じんせいは何色にでもなるんだよ。」

雨上がりの空には、きれいなじがかかっていた。ぼくは、にじ色の人生になるように奄美の森でがんばろうと心にちかった。